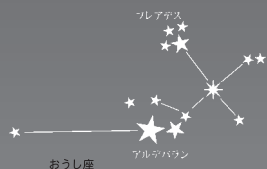


ポラリスを仰ぐ北の大地から



開陽丸進水150年

檜山医師会 会長 鶴谷 隆司

開陽丸を皆さんはご存知でしょうか。江戸幕府随一の軍艦で、江差沖で暴風雨に遭い座礁、沈没し進水から3年でその短い生涯を閉じました。開陽丸がオランダで建造され日本に到着して4ヵ月後に大政奉還、王政復古の号令が出ます。これにより徳川幕府が押さえていた政治の実権が完全に天皇率いる新政府のものとなり、開陽丸も新政府に引き渡されました。しかし、旧幕府の家臣榎本釜次郎(武揚)らは船を奪ひ品川沖から蝦夷地に向かったのです。

NHKの大河ドラマでも江戸末期から明治維新までの歴史物は特に人気があり私もよく見ていますが、榎本武揚や新撰組の土方歳三らが活躍する戊辰戦争末期、ここ江差の沖での出来事が、その後の歴史に何らかの影響を及ぼしたと思われると歴史のロマンを感じざるを得ません。開陽丸を失ったことが間接的に戊辰戦争の早期の終結と明治国家の確立へと導かれました。また鳥羽・伏見の戦いにおいて旧幕府軍が敗退し形勢不利になったと見るや、将軍徳川慶喜は大阪から江戸へ船で退却しましたが、この時に使われたのも開陽丸でした。

江差沖に沈没した開陽丸の遺品の引き上げは何度か行われましたが、昭和49年当時の江差町教育委員会教育長の石橋藤雄氏(現在札幌在住)の懸命な努力により多くの遺留品が発見され展示されています。江差には幕末の史跡がいろいろありますが、私が今勤めている病院の場所には関川家という商家があり、明治2年に新政府軍が江差に上陸した際には長州藩の宿所となり、品川弥二郎等が利用したとのことでした。

今年はこの開陽丸が進水してからちょうど150年目を迎えます。

歴史に興味のある方は是非江差町を訪れてみてください。



消滅前にできること

北部檜山医師会 会長 森 利光

40年後が見えません。消滅可能性自治体にあげられ医療も集約化が求められています。昨年度は2小学校が廃校になり、平成の合併10年になりますが町の過疎化は加速しているようにみえます。1960年代に夢中でみた鉄腕アトムは2003年の生まれです。高層ビルがならびハイウェイの街並みは見事に40年後を予想しています。心やさしい、ラララ、科学の子〜。アトムは悩むのです。子どもが生まれたときの喜びや人が死んでいく時の哀しみといった、人なら誰もがもっている感情が自分がないことを。アトムが現代人と重なりあいます。

多職種連携、地域包括支援をkey wordsに北渡島檜山医療と介護の連絡会、北渡島檜山在宅医療連絡協議会などで2次医療圏のメンバーが集まります。50km離れた遠方から1時間かけて皆が集まるのは容易なことではありません。日本海と太平洋の2つの総合振興局にまたがる唯一の医療圏です。特に冬は大変です。日本海側が晴れていても太平洋側が猛吹雪ということが珍しくないからです。体調の悪い患者さんや高齢者、子どもを抱えた親が行き来していることに驚きます。実際、高次医療圏を受診後、疲れて体調を崩す方がいます。北渡島檜山医療圏は2473.63km²の広さです。面積は神奈川県より広いのですが北海道全体の2.96%にしか相当しません。あらためて北海道の広さを痛感します。集約化は住民に覚悟を求めています。それでも住み続けるのですか?と住民に問うのは野暮な質問です。

目の前の患者さんに全力を尽くします。しかし人のいないところに病院は不要という原理を前に、刻々と人口が減っていく町であたかも閉院に向けての残務整理をしているかのようなむなしさを感じる時があります。手塚治虫にご登場願ひ40年後を予想してもらいたいと切に思うことがあります。